大きくなったKくんと遊んだ日に

津守　真

Kくんは、養護学校高等部を卒業して、久しぶりに私共の学校に母親と一緒に来た。病気で入院したと聞いていたが、門を入ると、すぐに砂場に走って来て、砂の中に座り、手で砂を持ち上げて落とすのを何度も繰り返した。六年前に小学部にいたKくんは、毎朝学校に来ると、同じように砂場で砂を持ち上げては落とし、体中水と砂にまみれて長時間遊んでいた。

体の大きなKくんが砂場にきたので、それまで砂で遊んでいた幼稚部のJくんは、砂場をはなれて、水道のホースで水を出し始めた。そうすると、Kくんも水道にきて、Jくん

のホースをとる。Jくんは一瞬びっくりする。Kくんがバケツで水をくみ出すと、Jくんもバケツで水をくみ出して、水を空中にまく。見ているとどちらも海の波のイメージである。こうして取ったり取られたりしながら、私はその間に入って、子どもたちの間の調整に追われた。一時間近く奮闘した。Jくんが去ると、Kくんは、砂場にねそべって、じっくりと砂をいじり、水場に来ても落ち着いて砂で遊んでいる。前半のダイナミックな活動とは異なり、静けさがある。十二時頃になって、着替えようと何度か予告したら、間もなく二階に上がって来た。

私はこれを付き合いながら、Kくんが小さかったときのことを考えた。この子の砂と水のやり方の本質は変わっていない。ただ、あのころはもっと感覚的だった。今のほうがイメージがあるみたいである。今、週の半分過ごしている千葉県の家の近くの海のイメージと共通なのではないかと考えた。イメージは、その場面だけの直接感覚ではなく、違った場面と重ね合わせて見いだす共通性の意識である。同じ場所で、似通った遊びをしていても、彼の中で起こっていることは違うだろう。そして、小さい子どもがそばにいるので、私はいろいろと口をだすのだが、それを聞いて、自分の行動の仕方を変えている。

Kくんと付き合っていると、私のジーパンもシャツも水と泥だらけになる。小さいときにこうしてすごした場所に来ると、身体は大きいのに同じことをするから、連れて来るのが億劫でしょうと私は母にたずねた。母は「いえ、そうじゃないんです。水と泥をするの

は、この子にとっては呼吸するのと同じようなものなんです。一日のどこかでやらなければ気が済まない。都会の家の中だけでは一週間はもたないから海辺の家に行くんです。水と泥をやったあとは、静かに家の中で音楽を聴いて過ごします。学校だと子どもが部屋に出入りして、静かに過ごすことができないから、小さい子が一緒の学校は、この子に向かないんです」と言った。

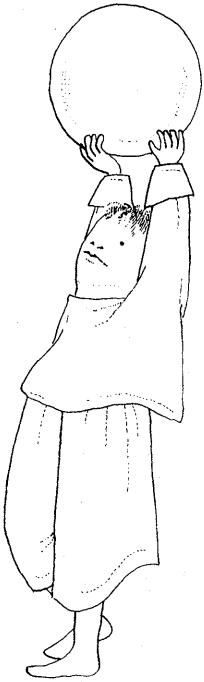
いまから十二年前、Kくんが私共の学校に来たとき、彼は、私が手に渡したビーンボールを床に落として、見向きもせずに走り去った。何度も渡しては落とすことを繰り返した。そのとき私は手にもった物を床に落として見向きもしないのだから、この子は虚空の中をさまよい走っているのではないかと思った。それほどに、この子の存在感が不確かなのだろうと考えた。それならば、何度でも私が拾ってしっかりとビーンボールを渡そうと思った。そうしている間に、Kくんは私を見て受け取るようになった。この行動を、こんなふうに解釈するのは少し無理かと思いながら、私は、考えたことを思い切って母親に話した。母親は、今まで彼の行動を意味あるものと思って見たことはなかったと言った。

その当時Kくんは、体中にシャワーでお湯をかけ、砂の中に身体を横たえて遊んだ。二歳半までは普通に育っていたKくんは、あるとき手術の後遺症で障害を受け、歩行も言語もなくなり、ついに全く話さなくなってしまった。その間のことを想像すれば、今までで

きていたことが日毎に失われていく体験で、子どもにとってはそれはどんなに大きな喪失感だったろうかと思う。自分の存在が根底から失われたように感じたであろう。水と砂を身体全体にかけることをはじめたとき、彼はその触運動感覚によって直接に自分の身体の存在を確かめていたのだろうと思う。もしも水と砂がなかったならば、この子はみずからの存在の確かさを取り戻せなかったかもしれない。母親が、この子にとっては水と砂は呼吸と同じですと言ったのは、それが存在を支えるものだったことを示している。

高等部を卒業した年齢になって、身体も大きな人が、公園の砂場でこうして遊んでいたら、周囲の人達は、奇異に感ずるだろう。でもそういうことはありうるのである。二歳半まで利発に育っていただけに、一夜のうちにすべての能力を失ったのを見た親の、そのときの気持ちが何十年後にまでつづいても不思議はない。しかし、悲しみだけでとどめてはならないと思う。障害を受けた子どもがこの社会に一緒にいるからこそ、私共の社会は健全なものとなるという人生の大きな真理を再認識したい。健康な者だけの社会だったら、それはうるおいのない偏った社会である。

これを書いていたとき、私は秋山さと子さんの遺稿集『永遠の子どもたち』（法蔵館一九九四）を読んでいた。その中で、「傷つけた者がまた癒す」という古代の神話的主題

に言及し、「毒が薬として使われ、また薬が毒ともなるように、病気そのものが明確に薬、または治癒としての権威を与えられている」「神話的な領域では、治癒の可能性はただひとつだけ、すなわち、自分自身が病み傷ついた神が個人的に介在することで行われる」（p・108）ことが語られていた。このことを根本的に考えさせてくれる。

（愛育養護学校）